書き抜き読書ノート 1040	2011 年 8 月 2 日

アラン著、神谷幹夫編訳「四季をめぐる 51 のプロポ」岩波文庫 2002 年 3 月 15 日刊を読む

人間の価値を棄てるなーシェイクスピアー

１．「人間の価値を棄てるな」。この言葉を、ある石炭配達人がもう一人の石炭配達人に話していた。幾百の他の亡霊とともに駅を出ながら、そして亡霊と同じように機械文明の歩調をまねながら、ぼくはしかしながら、はるかにあのオリュンポスの神々の一群を、歩道の端に、見たのだった。ある者は背が高く、ある者は小さく、二人とも強く、地球の上にしっかり立っている。自分の生計を立てて、崇高な思惟を営む存在として。これらの顔は裁判官には見られない。なぜなら、われわれの裁判官はおそらく、亡霊のあいだで、もっとも判断を下さないものであるから。人間を見張ることはできない。そんな必要もない。人間は見たときにその人のすべてが見える。ぼくは幸いにも、亡霊たちのあいだで生き返ることができた。ぼくは「真の〔隠れている〕(注1)人間」を見た。

２．人間の姿をした神々はほんとうに人間であるが、突然、そのすぐれた人間わざのなかで照らし出された(注2)と、ぼくは思う。したがって、あらゆる種類の神がいた。農耕の神々もいれば戦（いくさ）の神々もいる。すべての神がその存在によって一種の正義を表現している。神々の衣装によってではなく、神々の存在によって、とぼくはいう。すなわちそれは、力を通しての正義であって、無能力を通しての正義ではないのだ。自分の手をすぐにヘラクレスの強い手のなかに置かない子どもはいない。したがって、この小さな子らは、大人のあいだで怖がることなく平然と生きている。そのことを省察することもない。美は到るところにあるが、それが記憶に残るのはまれである。記憶に残るのは外見であり名残である。記憶は愚弄している。〔無声〕映画がその象徴である。そこには記憶の機械的な揺れがある。見かけの見かけ(注3)、愚弄された愚弄家。

３．シェイクスピアにはどんな予防線もない。どんな悪意もない．彼の作品は〔生きた現実の〕かけらからなっている。ここには脚が、あそこには拳骨がある。そして開いた眼、なにも告げていない、なにもあとに来ない言葉。すべてのものが全（まった）き〔生きた〕リアリティを有している。そのように、「隠れている人間」が顕わとなっている。それだけで十分なのだ。それが通りを行く人だろうが、門番だろうが、カエサルだろうが。クレオパトラも、ジュリエットも、ジェシカも、またフォルスタフも、オートリコスも、ヘンリ八世も、みんな同じである。存在に順位が付されるのは存在のかなた〔非存在〕においてである。非存在が巧みに構成されている。しかし存在は構成を、すなち結合を拒絶する。宮廷人であるゲーテは、亡霊たちを愚弄している。そこでは彼自身、亡霊なのだ。しかし彼は「永遠」をも見ていた。「人間はすべて、その本来の場所では永遠である」と彼は言った。芸術とは、愚弄することのないこの記憶である。ファウストは彼自身の力によって、永遠に存在している、〔太陽の反復と生のつねに新しい保存によって〕この若い朝に〔彼はすでに〕老いているが(注4)。ミニョンは太陽とオレンジの木から遠く離れて、永遠に歌い踊っている。「永遠」を垣間見させるこれらの力強いかけらによって、また二つのオペラが救われている。これらの厳かな廃墟に対して、滑稽さはどんな影響力ももたない。ひとはこれら

の舞台装飾を信頼している。テノールを、重々しいバスを、プリマを信頼している。もし確かに神々が見えるなら、期待しない者がいるだろうか、忍耐しない者がいるだろうか。

1922 年 12 月 30 日

(注１)ある働きのもとで、ある条件のなかで、いな、なんであれ、ある文化的な装いのもとで、多かれ少なかれ隠れているような人間。この意味では真の人間、しかし、理念的あるいは規範的な意味ではない。むしろ実体的な意味での人間である。なぜなら、そういってよければ、自分自身のリアリティとして受け入れることのできない、ある本質に参与する「生成としての存在」(流転のうちにある存在)が問題であるから。

(注２)神々は、人間がその人間精神を(すぐにそれを裏切ることになるが)強調する束の間の、まばゆいばかりの輝きを成就している。

(注３)もはやあらわれていない外見、そういってよければ、あらわれたものの形として維持されているが、しかしあらわれる現動(アクト)から、すなわち印象を生き生きとさせる現前性から切り離された外見。したがって、はっきり思い出すことのできるかたちであるが、知覚が再生される存在をもたない外見。記憶は、もし感情のようなものでなければ、空洞の痕跡。不在の鋳型しか保存していない。そこから、精神は愚弄することになる。つまり非本質的なものとして取り扱うことになる。現実においてそれは自分自身であることに気づかない。そのときそれ(自分自身)は愚弄の対象であり、外見を見かけ(幻)に還元しているため、自己を世界に生み出す行為において自分自身を否認している。記憶は愚弄している、精神にオートマティスム(機械的行為)あるいは反復を与えるかぎりで。

(注４)ファウストは永遠に(あるいは本質によって)至高者であろうとする、そして全能――生に対する勝利と無垢に対する支配を主張する全能――をねらうあの老いた知である。

P191~195

[コメント]

「プロポ」は、1868 年にフランスで生まれ、リセの哲学教授であると同時にジャーナリストとして活躍したアランのつくり出した文学ジャンルで「かたち」という意味だそうだ。葉書き 1 枚 2 ページに書かれた断章で、修正することなく一気に書き上げられている(以上、同書、訳者あとがきより引用)。哲学に裏打ちされた知性とはこのようなものかと深い感動を覚える文章だ。この文章を読んでシェイクスピアを読みたくなる衝動にかられるのは私だけではないかもしれない。アラン、素晴らしい思索者だ。

－ 2011 年 8 月 2 日林　明夫記－